

## \*天文学と過ごした年月\*

理論天文学研究系系  
大木健一郎

1969年に天文台採用されて以来、何と35年もの勤続には自分でも驚いてしまう。なぜなら、自分のことを移り気な人間だと感じているからだ。天文台に入る以前にも、興味の対象や志望が次々と変遷した。高校は東大受験コースに居たのに、よりアカデミックに感じた京大に入学していた。理論物理をやる筈が、念願の湯川先生の講義を聴講してみても、期待どおりでなかっただけで、宇宙物理学に進学し、輻射輸送理論で修論を書こうと勉強始めたのに、Wild達の論文に出会い、修論は「太陽フレアでの粒子加速」となっていた。当時の太陽電波で先端的な技術を持っていた電波研平磯に就職が決まりかけていたのに、面接旅行の帰途に、ふと立ち寄った三鷹で故高倉・甲斐両先生と出会い、理論的にも面白そうな世界があることを知った。悩む間もなく東大博士課程への試験を受けていた。かくして、67年より院生として天文台に在籍し、幸い1年目で太陽硬X線放射の異方性を初めて論じた論文で一石を投じることになり、当時の米国で始まったばかりの新分野でデビューを果たせたのはラッキーだった。翌69年には助手に採用された。以来、35年も在籍することになったのは、よほど天文台の環境がしっくりきて、根を生やしてしまったのだろうか。



紅葉の季節 天文台百景

しかし特に前半では、研究対象がすぐに変わってしまう癖は抜けていなかった。台内外の居場所や付きあうグループが宇宙研、NASAを含めて20年間くらいで、8回も入れ替わっている。いよいよ成果の収穫をしようとした矢先の30歳台後半には、息切れしたのか大病をし、その後は入退院を繰り返す有様だった。やっと克服し、新生理論部のスタッフにもなれたので、ここでもう一花咲かせようと思った矢先、また慢性病が復活し、そうこうしている内に50歳台も半ばとなった頃、最悪のガンを発病し内臓摘出手術と、ひどい目に遭ったが、運良く命拾いしたようだ。そのせいか、最後の数年間は、何か次の世代の人たちに役立つことをと(殊勝にも)考えた。これまでを振り返ると、「出会い」の大切さを感じる。それは、人物や観測装置に留まらず、一冊の本、たった一篇の論文でも出会いが起こり得る。閃いた時どんな場所に居ても、それを瞬時に手に入れることが望ましい。また逆に情報の方から出会いを求めて自動的に接近して来るAlertシステムも大切だ。しかも一度出会った知識は、見失うことなく自分の周辺にデータベースとして蓄積し、いつでも何処でもユビキタスに利用出来る状態に置く。まだ目標の一部に過ぎないが、それを具現化したのが「天文学ネットワーク図書館」である。他にも別グループがJVOや他の仮想天文台として、先端的な観測データの高度利用を目指しているが、将来は、これらのシステムと融合し、最高の研究環境を提供できるようになればという夢を持っている。

最後に(主に前半の)研究歴を振り返ると、波長では電波からガンマ線、粒子線まで殆どの波長域で手掛けた研究・技術分野は太陽物理に始まり高エネルギー天文分野に及ぶ(赤外は論文1本だけだが)。検出器・受信装置作りで、まあまあ